サ 詩百十九〇卅四、七十三、百六十九
キ 詩五〇三、八十八〇十三、百卅〇六
ユ 詩百十九〇七十四
メ 詩六十三〇一、六
ミ 詩百十九〇四十、百五十四
シ 詩百四十五〇十八
ヱ 詩百十九〇百四十二
ヒ 路廿一〇卅三
モ 哀五〇一
セ 母上廿四〇十五 詩卅五〇一 米七〇九
ス 詩百十九〇四十
イ 伯五〇四
ロ 詩百十九〇百四十九
ハ 詩四十四〇十八、百十九〇五十一
ニ 詩百十九〇百卅六 結九〇四
ホ 詩百十九〇八十八

樂あり　百四四 なんぢの證詞はとこしへに義し、ねがはくはわれに[サ]智慧をたまへ我ながらふることを得ん

○コフ

百四五 われ心をつくしてよばはれり、ヱホバよ我にこたへたまへ我なんぢの律法をまもらん　百四六 われ汝をよばはれり、ねがはくはわれを救ひたまへ我なんぢの證詞をまもらん　百四七 [キ]われ詰朝おきいでゝ呼れり、われ聖言によりて望をいだけり　百四八 [メ]夜の更のきたらぬに先だちわが眼はさめて汝のみことばを深くおもふ　百四九 [ユ]ねがはくはなんぢの仁慈にしたがひてわが聲をきゝたまへ、ヱホバよ[ミ]なんぢの審判にしたがひて我をいかしたまへ　百五十 惡をおひもとむるもの我にちかづけり、彼等はなんぢの法にとほくはなる　百五一 [シ]ヱホバよ汝はわれに近くましませり、[ヱ]なんぢのすべての誡命はまことなり　百五二 われ早くよりなんぢの證詞によりて汝がこれを永遠[ヒ]にたてたまへることを知れり

○レシ

百五三 [モ]ねがはくはわが患難をみて我をすくひたまへ、我なんぢの法をわすれざればなり　百五四 [セ]ねがはくはわが訟をあげつらひて我をあがなひ[ス]聖言にしたがひて我をいかしたまへ　百五五 すくひは惡きものより遠くはなる、かれらはなんぢの律法をもとめざればなり　百五六 ヱホバよなんぢの憐憫[イ]はおほいなり願くは[ロ]なんぢの審判にしたがひて我をいかしたまへ　百五七 我をせむる者われに敵する者おほし[ハ]我なんぢの證詞をはなるゝことなかりき　百五八 虛僞をおこなふもの汝のみことばを守らざるにより我かれらを見てうれひたり　百五九 ねがはくはわが汝のさとしを愛すること幾何なるをかへりみたまへ、ヱホバよなんぢの仁慈[ニ]にしたがひて我をいかしたまへ　百六十 なんぢのみことばの總計はまことなり汝のたゞしき審判はとこしへにいたるまで[ホ]皆たゆ

ヘ 母上廿四〇十一、十四、廿六〇十八 詩百十九〇廿三
ト 箴三〇二 賽卅二〇十七
ナ 創四十九〇十八 詩百十九〇百七十四
リ 箴五〇廿一
ヌ 詩百十九〇百四十四
ル 詩百十九〇七
チ 書廿四〇廿二 箴一〇廿九 路十〇四十二
ワ 詩百十九〇百六十六
カ 詩百十九〇十六、廿四、四十七、七十七、百十一
ヨ 賽五十三〇六 路十五〇四 彼前二〇廿五

ることなし

○シン

百六一 [ヘ]もろもろの侯はゆゑなくして我をせむ然どわが心はたゞ汝のみことばを畏る　百六二 われ人のおほいなる掠物をえたるごとくに汝のみことばをよろこぶ　百六三 われ虛僞をにくみ之をいみきらへども汝ののりを愛す　百六四 われ汝のたゞしき審判のゆゑをもて一日に七次なんぢを讃稱ふ　百六五 [ト]なんぢの法をあいするものには大なる平安あり、かれらには躓礙をあたふる者なし　百六六 [チ]ヱホバよ我なんぢの救をのぞみ汝のいましめをおこなへり　百六七 わが靈魂はなんぢの證詞をまもれり我はいたく之をあいす　百六八 われなんぢの訓諭となんぢの證詞とをまもりぬ、[リ]わがすべての道はみまへにあればなり

○タウ

百六九 ヱホバよ願くはわがよぶ聲をみまへにちかづけ[ヌ]聖言にしたがひて我にちゑをあたへたまへ　百七十 わが願をみまへにいたらせ聖言にしたがひて我をたすけたまへ　百七一 [ル]わがくちびるは讃美をいだすべし、汝われに律法ををしへたまへばなり　百七二 わが舌はみことばを謳ふべし、なんぢの一切のいましめは義なればなり　百七三 なんぢの手をつねにわが助となしたまへ、われなんぢの訓諭をえらび用ゐたればなり　百七四 ヱホバよ[ワ]我なんぢの救をしたへり、[カ]なんぢの法はわがたのしみなり　百七五 願くはわが靈魂をながらへしめたまへ、さらば汝をほめたゝへん、汝のさばきの我をたすけんことを　百七六 [ヨ]われは亡はれたる羊のごとく迷ひいでぬ、なんぢの僕をたづねたまへ、われ汝のいましめを忘れざればなり

第百二十篇

京詣のうた

第百二十篇

一 われ困苦にあひてヱホバをよびしかば我にこたへたまへり　二 ヱホバよねがはくは虛僞のくちびる欺詐
の[イ]舌よりわが靈魂をたすけいだしたまへ　三 あざむきの舌よなんぢに何をあたへられ何をくはへらるべき
か　四 ますらをの利き箭と金雀花のあつき炭となり　五 わざはひなるかな我は[ロ]メセクにやどり[ハ]ケダルの幕屋
のかたはらに住り　六 わがたましひは平安をにくむものと偕にすめり　七 われは平安をねがふ、されど我も
のいふときにかれら戰爭をこのむ

第百二十一篇　京まうでの歌

一 われ山にむかひて目をあぐ、わが扶助はいづこよりきたるや　二 [イ]わがたすけは天地をつくりたまへるヱ
ホバよりきたる　三 ヱホバは[ロ]なんぢの足のうごかさるゝを容したまはず[ハ]汝をまもるものは微睡たまふこと
なし　四 視よイスラエルを守りたまふものは微睡こともなく寢ることもなからん　五 ヱホバは汝をまもる者
なり[ニ]ヱホバはなんぢの右手をおほふ[ホ]蔭なり　六 [ヘ]ひるは日なんぢをうたず夜は月なんぢを傷じ　七 ヱホバはな
んぢを守りてもろ〱の禍害をまぬかれしめ[ト]並なんぢの靈魂をまもりたまはん　八 ヱホバは今よりとこし
へにいたるまで[チ]汝のいづると入るとをまもりたまはん

第百二十二篇　ダビデのよめる京まうでの歌

一 人われにむかひて[イ]率ヱホバのいへにゆかんといへるとき我よろこべり　二 ヱルサレムよわれらの足はな
んぢの門のうちにたてり　三 ヱルサレムよなんぢは[ロ]稠くつらなりたる邑のごとく固くたてり　四 もろ〱の
やから即ちヤハの支派かしこに上りきたり[ハ]イスラエルにむかひて證詞をなし、またヱホバの名にかんし
やをなす　五 [ホ]彼處にさばきの寶座まうけらる、[ニ]これダビデの家のみくらなり　六 [ヘ]ヱルサレムのために平安を

[イ] 詩百十八〇五 拿二〇二
[ロ] 創十〇二 結廿七〇十三
[ハ] 創廿五〇十五 撒上廿五〇一 耶四十九〇廿八、廿九
[イ] 詩百廿四〇八
[ロ] 撒上二〇九 箴三〇廿三、廿六
[ハ] 詩百廿七〇一 賽廿七〇三
[ニ] 詩十六〇八、百九〇卅一
[ホ] 賽廿五〇四
[ヘ] 詩九十一〇五 賽四十九〇十 默七〇十六
[ト] 詩四十一〇二、九十七〇十、百四十五〇廿
[チ] 申廿八〇六 箴二〇八、三〇六
[イ] 賽二〇三 亞八〇廿一
[ロ] 撒下五〇九
[ハ] 出廿三〇十七 申十六〇十六
[ニ] 出十六〇卅四
[ホ] 申十七〇八 代下十九〇八
[ヘ] 詩五十一〇十八

いのれ、ヱルサレムを愛するものは榮ゆべし　七 ねがはくはなんぢの石垣のうちに平安あり、なんぢの諸殿
のうちに福祉あらんことを　八 わが兄弟のためわが侶のためにわれ今なんぢのなかに平安あれといはん　九
われらの神ヱホバのいへのために[ト]我なんぢの福祉をもとめん

第百二十三篇　京まうでの歌

一 [イ]天にいますものよ[ロ]我なんぢにむかひて目をあぐ　二 みよ僕らの主の手に目をそゝぎ婢女らの主母の手に
目をそゝぐがごとくわれらはわが神ヱホバに目をそゝぎてそのわれを憐みたまはんことをまつ　三 ねがは
くはわれらを憐みたまへヱホバよわれらを憐みたまへ、そはわれらに輕侮はみちあふれぬ　四 おもひわづ
らひなきものの凌辱とたかぶるものの輕侮とはわれらの靈魂にみちあふれぬ

第百二十四篇　ダビデのよめる京まうでの歌

一 [イ]今イスラエルはいふべし、ヱホバもしわれらの方にいまさず　二 人々われらにさからひて起りたつとき
ヱホバもし我儕のかたに在さゞりしならんには　三 かれらの怒のわれらにむかひておこりし時[ロ]われらを生
るまゝにて呑しならん　四 また水はわれらをおほひ流はわれらの靈魂をうちこえ　五 高ぶる水はわれらの靈
魂をうちこえしならん　六 ヱホバはほむべきかな我儕をかれらの齒にわたして噛くらはせたまはざりき　七
我儕のたましひは[ハ]捕鳥者のわなをのがるゝ鳥のごとくにのがれたり羅はやぶれてわれらはのがれたり　八
[ニ]われらの助は[ホ]天地をつくりたまへるヱホバの名にあり

第百二十五篇　みやこ詣のうた

一 ヱホバに依頼むものはシオンの山のうごかさるゝことなくして永遠にあるがごとし　二 ヱルサレムを山

[ト] 尼二〇十
[イ] 詩二〇四、十一〇四、百十五〇三
[ロ] 詩百廿一〇一、百四十一〇八
[イ] 詩百廿九〇一
[ロ] 詩五十六〇一、二、五十七〇三 箴一〇十二
[ハ] 詩九十一〇三 箴六〇五
[ニ] 詩百廿一〇二
[ホ] 創一〇一 詩百卅四〇三

イ 箴廿二〇八 賽十四〇五
ロ 箴二〇十五
ハ 詩百廿八〇六 加六〇十六
イ 徒十二〇九
ロ 伯八〇廿一
ハ 耶卅一〇九
イ 詩百廿一〇三至五
ロ 創三〇十七、十九
ハ 創卅三〇五、四十八〇四 書廿四〇三、四
ニ 申廿八〇四
ホ 伯五〇四 箴廿七〇十一

のかこめるごとくヱホバも今よりとこしへにその民をかこみたまはん　三 [イ]惡の杖はたゞしきものゝ所領に
とゞまることあるべし、斯てたゞしきものはその手を不義にのぶることあらじ　四 ヱホバよねがはくは
善人とこゝろ直きものとに福祉をほどこしたまへ　五 されどヱホバは轉りて[ロ]おのが曲れる道にいるもの
を惡きわざをなすものとともに去しめたまはん、[ハ]平安はイスラエルのうへにあれ

第百二十六篇　京まうでの歌

一 ヱホバ シオンの俘囚をかへしたまひし時[イ]われらは夢みるもののごとくなりき　二 そのとき[ロ]笑はわれらの
口にみち歌はわれらの舌にみてり、ヱホバかれらのために大なることをなしたまへりといへる者もろ〳〵
の國のなかにありき　三 ヱホバわれらのために大なることをなしたまひければ我儕はたのしめり　四 ヱホバ
よ願くはわれらの俘囚をみなみの川のごとくに歸したまへ　五 [ハ]涙とともに播くものは歡喜とともに穫ら
ん　六 その人は種をたづさへ涙をながしていでゆけど禾束をたづさへ喜びてかへりきたらん

第百二十七篇　ソロモンのよめる京まうでのうた

一 ヱホバ家をたてたまふにあらずば建るものゝ勤勞はむなしく[イ]ヱホバ城をまもりたまふにあらずば衞士
のさめをるは徒勞なり　二 なんぢら早くおき遲くいね[ロ]辛苦の糧をくらふはむなしきなり、斯てヱホバはそ
の愛しみたまふものに寢をあたへたまふ　三 みよ[ハ]子輩はヱホバのあたへたまふ嗣業にして[ニ]胎の實はその報
のたまものなり　四 年壯きころほひの子はますらをの手にある矢のごとし　五 矢のみちたる箙をもつ人はさ
いはひなり、[ホ]かれら門にありて仇とものいふとき恥ることあらじ

第百二十八篇　京まうでの歌

イ 詩百十二〇一、百十五〇十三、十九〇一
ロ 賽三〇十
ハ 結十九〇十
ニ 詩五十二〇八、百四十四〇十二
ホ 詩百卅四〇三
ヘ 創五十〇廿三 伯四十二〇十六
ト 詩百廿五〇五
イ 詩百廿四〇一
ロ 結廿三〇三 何二〇十五、十一〇一
ハ 詩卅七〇二
ニ 得二〇四 詩百十八〇廿六
イ 哀三〇五十五 拿二〇二
ロ 詩百四十三〇二 羅三〇廿、廿三、廿四
ハ 出卅四〇七
ニ 王上八〇四十 詩二〇十一 耶卅三〇八、九
ホ 詩廿七〇十四、卅三〇廿、四十〇一 賽八〇十七、廿六〇八、卅〇十八
ヘ 詩百十九〇八十一
ト 詩六十三〇六、百十九〇百四十七

一 [イ]ヱホバをおそれその道をあゆむものは皆さいはひなり　二 [ロ]そはなんぢおのが手の勤勞をくらふべければ
なり、なんぢは福祉をえまた安處にをるべし　三 なんぢの妻はいへの奥にをりて[ハ]おほくの實をむすぶ葡萄
の樹のごとく[ニ]汝の子輩はなんぢの筵に圓居してかれらの若樹のごとし　四 視よヱホバをおそるゝ者はかく
福祉をえん　五 [ホ]ヱホバはシオンより惠をなんぢに賜はん、なんぢ世にあらんかぎりエルサレムの福祉をみ
ん　六 [ヘ]なんぢおのが子輩の子をみるべし[ト]平安はイスラエルの上にあれ

第百二十九篇　京まうでのうた

一 [イ]今イスラエルはいふべし彼等はしば〳〵我をわかきときより惱めたり　二 かれらはしば〳〵[ロ]我をわかき
ときより惱めたり、されどわれに勝ことを得ざりき　三 耕すものはわが背をたがへしてその畎をながくせ
り　四 ヱホバは義し、あしきものゝ繩をたちたまへり　五 シオンをにくむ者はみな恥をおひてしりぞかせら
るべし　六 [ハ]かれらは長ざるさきにかるゝ屋上の草のごとし　七 これを刈るものはその手にみたず之をつかね
るものはその束をところに盈ざるなり　八 かたへを過るものは[ニ]ヱホバの惠なんぢの上にあれといはず、
われらヱホバの名によりてなんぢらを祝すといはず

第百三十篇　京まうでの歌

一 あゝヱホバよわれ[イ]ふかき淵より汝をよべり　二 主よねがはくはわが聲をきゝ汝のみゝをわが懇求のこゑ
にかたぶけたまへ　三 [ロ]ヤハよ主よなんぢ若もろ〳〵の不義に目をとめたまはゞ誰かよく立ことをえんや　四
されど[ハ]なんぢに赦あれば[ニ]人におそれかしこまれ給ふべし　五 [ホ]我ヱホバを俟望むわが靈魂はまちのぞむ、わ
れは[ヘ]その聖言によりて望をいだく　六 [ト]わがたましひは衞士があしたを待にまさり誠にえじが旦をまつにま

チ 詩百卅一〇三
リ 詩八十六〇五、十五　賽五十五〇七
ヌ 詩百三〇三、四　太一〇廿一
イ 羅十二〇十六
ロ 太十八〇三　哥前十四〇廿
ハ 詩百卅〇七
イ 創四十九〇廿四
ロ 詩六十五〇一
ハ 徒七〇四十六
ニ 箴六〇四
ホ 母上十七〇十二
ヘ 代上十三〇五
ト 母上七〇一
チ 詩五〇七、九十九〇五
リ 民十〇卅五　代下六〇四十一、四十二
ヌ 詩七十八〇六十一
ル 伯廿九〇十四　詩百卅二〇十六　賽六十一〇十
ヲ 詩八十九〇三、四、卅三、百十〇四
ワ 母下七〇十二　王上八〇廿五　代下六〇十六　路一〇六十九　徒二〇卅
カ 詩四十八〇一、二

さりて主をまてり　七イスラエルよヱホバによりて望をいだけ、そはヱホバにあはれみあり、またゆたかなる救贖あり　八ヱホバはイスラエルをそのもろ〳〵の邪曲よりあがなひたまはん

第百三十一篇　ダビデのよめる京まうでのうた

一ヱホバよわが心おごらずわが目たかぶらず、われは大なることと我におよばぬ奇しき事とをつとめざりき　二われはわが靈魂をもださしめまた安からしめたり、乳をたちし嬰兒のその母にたよるごとく我がたましひは乳をたちし嬰兒のごとくわれに恃れり　三イスラエルよ今よりとこしへにヱホバにたよりて望をいだけ

第百三十二篇　京まうでの歌

一ヱホバよねがはくはダビデの爲にそのもろ〳〵の憂をこゝろに記たまへ　二ダビデヱホバにちかひヤコブの全能者にうけひていふ　三四五われヱホバのために處をたづねいだしヤコブの全能者のために居所をもとめうるまでは我家の幕屋にいらず、わが臥床にのぼらず、わが目をねぶらしめず、わが眼瞼をとぢしめざるべしと　六われらエフラタにて之をきゝヤアルの野にて見とめたり　七われらはその居所にゆきてその承足のまへに俯伏さん　八ヱホバよねがはくは起てなんぢの稜威の櫃とともになんぢの安居處にいりたまへ　九なんぢの祭司たちは義を衣なんぢの聖徒はみな歡びよばふべし　十なんぢの僕ダビデのためになんぢの受膏者の面をしりぞけたまふなかれ　十一ヱホバ眞實をもてダビデに誓ひたまひたれば之にたがふことあらじ　曰く、われなんぢの身よりいでし者をなんぢの座位にざせしめん　十二なんぢの子輩もしわがをしふる契約と證詞とをまもらばかれらの子輩もまた永遠になんぢの座位にざすべしと　十三ヱホバはシオンを擇びてお

ヨ 詩六十八〇十六
タ 詩百四十七〇十四
レ 代下六〇四十一　詩百卅二〇九、百四十九〇四
ソ 何十一〇十二
ツ 結廿九〇廿一　路一〇六十九
子 王上十一〇卅六、十五〇四　代下廿一〇七
ナ 詩卅五〇廿六、百九〇廿九
イ 創十三〇八　來十三〇一
ロ 出卅〇廿五、卅
ハ 申四〇四十八
ニ 利廿五〇廿一　申廿八〇八　詩四十二〇八
イ 代上九〇卅三
ロ 詩百卅五〇一、二
ハ 提前二〇八
ニ 詩百廿四〇八
ホ 詩百廿八〇五、百卅五〇廿一
イ 詩百十三〇一、百卅四〇一
ロ 路二〇卅七
ハ 詩九十二〇十三、九十六〇八、百十六〇十九
ニ 詩百四十七〇一
ホ 出十九〇五　申七〇六、七、十〇十五

のが居所にせんとのぞみたまへり　十四曰くこれは永遠にわが安居處なり、われこゝに住ん、そはわれ之をのぞみたればなり　十五われシオンの糧をゆたかに祝し、くひものをもてその貧者をあかしめん　十六われ救をもてその祭司たちに衣せん、その聖徒はみな聲たからかによろこびよばふべし　十七われダビデのためにかしこに一つの角をはえしめん、わが受膏者のために燈火をそなへたり　十八われかれの仇にはぢを衣せん、されどかれはその冠弁さかゆべし

第百三十三篇　ダビデがよめる京まうでの歌

一視よはらから相睦てともにをるはいかに善いかに樂きかな　二首にそゝがれたる貴きあぶら鬚にながれアロンの鬚にながれその衣のすそにまで流れしたゝるがごとく　三またヘルモンの露くだりてシオンの山にながるゝがごとし、そはヱホバかしこに福祉をくだし窮なき生命をさへあたへたまへり

第百三十四篇　京まうでの歌

一夜間ヱホバのいへにたちヱホバに事ふるもろ〳〵の僕よヱホバをほめまつれ　二なんぢら聖所にむかひ手をあげてヱホバをほめまつれ　三ねがはくはヱホバ天地をつくりたまへるものシオンより汝をめぐみたまはんことを

第百三十五篇

一なんぢらヱホバを讃稱へよ、ヱホバの名をほめたゝへよ、ヱホバの僕等ほめたゝへよ　二ヱホバの家われらの神のいへの大庭にたつものよ讃稱へよ　三ヱホバは惠ふかし、なんぢらヱホバをほめたゝへよ、その聖名はうるはし讃うたへ　四そはヤハおのがためにヤコブをえらみイスラエルをえらみてその珍寶となした

ト 詩九十五〇三、九十七〇九
チ 詩百十五〇三
リ 耶十〇十三、五十一〇十六
ヌ 伯廿八〇廿五、廿六、卅八〇廿四　亞十〇一
ル 伯卅八〇廿二
ヲ 出十二〇十二、廿九　詩七十八〇五十一、百卅六〇十
ワ 出七〇、八〇、九〇、十〇、十四
カ 詩百卅六〇十五
ヨ 民廿一〇廿四至廿六、卅四、卅五　詩百卅六〇十七
タ 書十二〇七
レ 詩七十八〇五十五、百卅六〇廿一、廿二
ソ 出三〇十五　詩百二〇十二
ツ 申卅二〇卅六
子 詩百十五〇四至八
ナ 詩百十五〇九至十一
ラ 詩百卅四〇三
イ 詩百六〇一、百七〇一、百十八〇一
ロ 代上十六〇卅四、四十一　代上廿〇廿一
ハ 申十〇十七
ニ 詩七十二〇十八

まへり　五 [ト]われエホバの大なるとわれらの主のもろ〳〵の神にまされるとをしれり　六 [チ]エホバはその聖旨にかなふことを天にも地にも海にも淵にもみなこと〴〵く行ひたまふなり　七 [リ]エホバは地のはてより霧をのぼらせ[ヌ]雨のために電光をつくりその[ル]庫より風をいだしたまふ　八 [ヲ]エホバは人より畜類にいたるまでエジプトの首出をうちたまへり　九 [ワ]エジプトよエホバはなんぢの中にしるしと奇しき事跡とをおくりてパロとその僕とに臨ませたまへり　十 [カ]エホバはおほくの國々をうち又いきほひある王等をころしたまへり　十一 [ヨ]アモリ人のわうシホン　バシヤンの王オグならびに[タ]カナンの國々なり　十二 [レ]かれらの地をゆづりとし、その民イスラエルの嗣業としてあたへたまへり　十三 [ソ]エホバよなんぢの名はとこしへに絶ることなし、エホバよなんぢの記念はよろづ世におよばん　十四 [ツ]エホバはその民のために審判をなし、その僕等にかゝはれる聖意をかへたまふ可ればなり　十五 [子]もろ〳〵のくにの偶像はしろかねと金にして人の手のわざなり　十六 そのぐうざうは口あれどいはず目あれど見ず　十七 耳あれどきかず、またその口に氣息あることなし　十八 これを造るものと之によりたのむものとは皆これにひとしからん　十九 [ナ]イスラエルの家よエホバをほめまつれ　アロンのいへよエホバをほめまつれ　二十 レビの家よエホバをほめまつれ　エホバを畏るゝものよエホバをほめまつれ　二十一 [ラ]エルサレムにすみたまふエホバはシオンにて讃まつるべきかなエホバをほめたゝへよ

第百三十六篇

一 [イ]エホバに感謝せよエホバはめぐみふかし、その憐憫はとこしへに絶ることなければなり　二 [ロ]もろ〳〵の神の神にかんしやせよ、その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　三 [ハ]もろ〳〵の主の主にかんしやせよ、その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　四 [ニ]たゞ獨りおほいなる奇跡をなしたまふものに感謝

ホ 創一〇一　箴三〇十九　耶五十一〇十五
ヘ 創一〇九　詩廿四〇二　耶十〇十二
ト 創一〇十四
チ 創一〇十六
リ 出　二〇廿九　詩百卅五〇八
ヌ 出十二〇五十一、十三〇三、十七
ル 出六〇六
ヲ 出十四〇廿一、廿二　詩七十八〇十三
ワ 出十四〇廿七　詩百卅五〇九
カ 出十三〇十八、十五〇廿二　申八〇十五
ヨ 詩　卅五〇十、十一
タ 申廿九〇七
レ 民廿一〇廿一
ソ 民廿一〇廿三

せよ、その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　五 [ホ]智慧をもてもろ〳〵の天をつくりたまへるものに感謝せよ、そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　六 [ヘ]地を水のうへに布たまへるものに感謝せよ、そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　七 [ト]巨大なる光をつくりたまへる者にかんしやせよ、その憐憫はとこしへに絶ることなければなり　八 [チ]晝をつかさどらするために日をつくりたまへる者にかんしやせよ、その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　九 夜をつかさどらするために月ともろ〳〵の星とをつくりたまへる者にかんしやせよ、その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　十 [リ]もろ〳〵の首出をうちてエジプトを責たまへるものに感謝せよ、そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　十一 [ヌ]イスラエルを率てエジプト人のなかより出したまへる者にかんしやせよ、そのあはれみはとこしへに絶ることなければなり　十二 [ル]臂をのばしつよき手をもて之をひきいだしたまへる者にかんしやせよ、その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　十三 [ヲ]紅海をふたつに分たまへる者にかんしやせよ、その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　十四 イスラエルをしてその中をわたらしめ給へるものに感謝せよ、そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　十五 [ワ]パロとその軍兵とを紅海のうちに仆したまへるものに感謝せよ、そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　十六 [カ]その民をみちびきて野をすぎしめたまへる者にかんしやせよ、その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　十七 [ヨ]大なる王たちを撃たまへるものに感謝せよ、そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　十八 [タ]名ある王等をころしたまへる者にかんしやせよ、その憐憫はとこしへに絶ることなければなり　十九 [レ]アモリ人のわうシホンをころしたまへる者にかんしやせよ、その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　二十 [ソ]バシヤンのわうオグを誅したまへるものに感謝せよ、そ

ツ 書十二〇一至八　詩百卅五〇十二
子 創八〇一　申卅二〇卅六　詩百十三〇七
ナ 詩百四〇廿七、百四十五〇十五、百四十七〇九
イ 詩七十九〇一
ロ 結三〇廿六
ハ 耶四十九〇七至十三　哀四〇廿二　結廿五〇十二　阿十至十八
ニ 賽十三〇一、六、四十七〇一　耶廿五〇十二、五十〇二
ホ 耶五十〇十五、廿九　默十八〇六
ヘ 賽十三〇十六

のあはれみは永遠にたゆることなければなり　二一 ツかれらの地を嗣業としてあたへたまへる者にかんしやせよ、その憐憫はとこしへにたゆることなければなり　二二 その僕イスラエルにゆづりとして之をあたへたまへるものに感謝せよ、そのあはれみは永遠にたゆることなければなり　二三 子わきらが微賤かりしときに記念したまへる者にかんしやせよ、その憐憫はとこしへに絶ることなければなり　二四 わが敵よりわれらを助けいだしたまへる者にかんしやせよ、その憐憫はとこしへに絶ることなければなり　二五 ナすべての生るものに食物をあたへたまふものに感謝せよ、そのあはれみはとこしへに絶ることなければなり　二六 天の神にかんしやせよ、その憐憫はとこしへに絶ることなければなり

第百三十七篇

一 われらバビロンの河のほとりにすわりシオンをおもひいでて涙をながしぬ　二 われらそのあたりの柳にわが琴をかけたり　三 そはわれらを虜にせしものわれらに歌をもとめたり、イ我儕をくるしむる者われらにおのれを歡ばせんとてシオンのうた一つうたへといへり　四 われら外邦にありていかでヱホバの歌をうたはんや　五 エルサレムよもし我なんぢをわすれなばわが右の手にその巧をわすれしめたまへ　六 もしわれ汝をおもひいでず、もしわれエルサレムをわがすべての歡喜の極となさずばロわが舌をわが腭につかしめたまへ　七 ヱホバよねがはくはエルサレムの日にハエドムの子輩がこれを掃除けその基までもはらひのぞけといへるを聖意にとめたまへ　八 ニほろぼさるべきバビロンの女よホなんぢがわれらに作しごとく汝にむくゆる人はさいはひなるべし　九 ヘなんぢの嬰兒をとりて岩のうへになげうつものは福ひなるべし

第百三十八篇

ダビデのうた

イ 詩百十九〇四十六
ロ 王上八〇廿九、卅　詩五〇七
ハ 詩廿八〇二
ニ 賽四十二〇廿一
ホ 詩百二〇十五、廿二
ヘ 詩百十三〇五、六　賽五十七〇十五
ト 箴三〇卅四　雅四〇六　彼前五〇五
チ 詩廿三〇三、四
リ 詩五十七〇二　腓一〇六
ヌ 伯十〇三、八、十四〇十五
イ 詩十七〇三　耶十二〇三
ロ 王下十九〇廿七
ハ 太九〇四　約二〇廿四、廿五
ニ 伯卅一〇四
ホ 來四〇十三
ヘ 伯四十二〇三　詩四十〇五、百卅一〇一
ト 耶廿三〇廿四　拿一〇三
チ 摩九〇二至四
リ 伯廿六〇六　箴十五〇十一

一 われはわが心をつくしてなんぢに感謝し、もろもろのイ神のまへにて汝をほめうたはん　二 ロ我なんぢのきよき宮にむかひて伏拜み、なんぢの仁慈とまこととの故によりて聖名にかんしやせん、そは汝そのみことばをもろもろのハ聖名にまさりて高くしたまひたればなり　三 汝わがよびし日にわれにこたへ、わが靈魂にちからをあたへて雄々しからしめたまへり　四 ニヱホバよ地の凡ての王はなんぢに感謝せん、かれらはなんぢの口のもろもろの言をきゝたればなり　五 ホかれらはヱホバのもろもろの途についてうたはん、ヱホバの榮光おほいなればなり　六 ヘヱホバは高くましませども卑きものを顧みたまふ、トされど亦おごれるものを遠よりしりたまへり　七 チ縱ひわれ患難のなかを歩むとも汝われをふたゝび活し、その手をのばしてわが仇のいかりをふせぎ、その右の手われをすくひたまふべし　八 リヱホバはわれに係れることを全うしたまはん、ヱホバよなんぢの憐憫はとこしへにたゆることなしヌ願くはなんぢの手のもろもろの事跡をすてたまふなかれ

第百三十九篇

伶長にうたはしめたるダビデの歌

一 ヱホバよなんぢはイ我をさぐり我をしりたまへり　二 ロなんぢはわが坐るをも立をもしり又とほくよりハわが念をわきまへたまふ　三 なんぢはわが歩むをもわが臥をもさぐりいだし、わがもろもろの途をことごとく知たまへり　四 ニそはわが舌に一言ありとも視よヱホバよホなんぢことごとく知たまふ　五 なんぢは前より後よりわれをかこみ、わが上にその手をおきたまへり　六 ヘかゝる知識はいとくすしくして我にすぐ、また高くして及ぶことあたはず　七 ト我いづこにゆきてなんぢの聖靈をはなれんや、われいづこに往てなんぢの前をのがれんや　八 チわれ天にのぼるとも汝かしこにいまし、リわれわが榻を陰府にまうくるとも視よなんぢ彼處に